

國學院大學学術情報リポジトリ

書評 鈴木道代著『大伴家持と中国文学』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, さやか, Inoue, Sayaka メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000111

〔書評〕

鈴木道代著 『大伴家持と中国文学』

井上さやか

本書の眼目は、その序章第一節「本書の目的」に表明されているとおり、「万葉歌人である大伴家持がいかに中国文学を受け入れ、自身の歌を創作する上で、新たな表現世界をいかに構築したか」という点にある。

ことに家持が国守として越中国に滞在していた時に、大伴池主によって言語化され提示された「倭詩」という概念に着目し、「ここから家持の新たな文芸が発する」とみて、『歌経標式』や『古今和歌集』序などにつながる〈歌学〉の発元と位置づけ、家持の歌世界を考察している。したがって本書で取り上

げられた歌は、『万葉集』四五〇〇余首の一割を超える家持作歌の中でも、巻十七～二十に収載された越中時代とそれ以降の作品が主である。

本書の内容を概観するために、目次部分を掲出しておきたい。

序章／第一部 家持と池主との交流歌―家持歌学の出発―
第一章 家持と池主の文章論―「山柿の門」と「山柿の歌泉」をめぐって―
第二章 家持の遊覧と賦の文学／第三章 家持と池主の離別歌―交友の歌学をめぐって―
／第二部 家持の

花鳥風詠と歌学 第一章 「庭中花作歌」における季節の花——
 なでしこ百合の花をめぐって——第二章 家持の花鳥歌——
 公鳥と時の花をめぐって——第三章 春苑桃李の花——幻想の中
 の風景——第四章 家持の七夕歌八首——第三部 家持の君臣
 像——詩学から政治へ——第一章 侍宴応詔歌における天皇像／
 第二章 応詔儲作歌における君臣像の特色とその意義／第三章
 家持歌における「皇神祖」の御代——「青き蓋」をめぐって——
 第四章 吉野行幸儲作歌における神の命と天皇観——結論——
 初出論文一覧／あとがき／索引（万葉集歌番号・事項）

「交友」「花鳥歌」「君臣観」に関する作品を一つ一つ取り上げ、中国詩学の影響と倭詩（和歌）としての昇華を、斬新な視点を盛り込んで分析する意欲的な論が並ぶ。

たとえば、第一部第二章では、『文選』『海賦』の表現方法を「エンサイクロペディア（百科事典）のシステム」、「「遊覧」賦の表現方法を「スクロールのシステム」として、家持の「遊覧の賦」は、中国詩学における「賦」のスクロールシステムを理解し、それを日本化したものであったとする。そうした六朝遊覧賦のシステムとともに、交友という六朝遊覧賦の理念をも踏まえて「倭詩」として新たに創造しようとしたと位置付け、そこに家持の〈歌学〉の視点が見えてくると結論する。あえて

カタカナ語を駆使し、挑発的な問題提起が試みられているといえよう。

他方で、本書において「スクロールシステム」の日本化とされた表現のありようは、中国文学を踏まえたまったく新しい表現方法というよりは、道行歌や行幸歌などの伝統的な和歌の手法に連なるものであるともい得るだろう。本書では、越中時代以前の家持による和歌表現の〈歌学び〉を前提としつつも、当然ながら中国詩賦の引用を中心に論が展開されており、少々抵抗を感じる場面もなくはない。おそらく根底には、〈歌学〉というものをどうとらえるか、という問題が横たわっている。

そもそも日本文学史の中で〈歌学〉の成立はなかったとする立場から、『万葉集』においてすでに〈歌学〉の萌芽があるとする立場まで、〈歌学〉という概念語についてはさまざまな見解がある。鈴木氏は、本書序章において、家持歌に理論と実践の融合としての〈歌学〉の萌芽を見る伊藤博氏や橋本達雄氏らの先行研究を踏まえ、「中国詩学の導入の問題と、それにより捉え直された〈歌〉の〈学〉を通して獲得した新たな歌表現」を〈歌学〉と称する、と表明している。中西進氏『万葉集の比較文学的研究』や辰巳正明氏『万葉集と中国文学』などの先行研究に拠りつつ、〈歌学び〉と〈歌学〉の両方の視点から「漢

文学的要請を消化した後の和歌の完成」を、家持歌から実践の〈歌学〉として汲み取ろうとする。

周知のとおり、家持と中国文学との関わりについては、契沖の『万葉代匠記』にはじまり、久松潜一氏や山田孝雄氏らによつて不可欠の研究視点として位置付けられた。昭和三十・四十年代の「山柿之門」に関する議論もよく知られ、以降、ことに現在では、家持作品の研究において中国文学との関わりに触れない論はほとんどないといつてよい。そうしたなかにあつて、本書は、従来の指摘に加えて『文選』や『玉台新詠』、六朝詩賦との表現比較をさらに深め、『文心雕龍』などにみえる中国の文学理論をいかに「倭詩」として表現したかという点に重きを置いている。

ただ、そうした家持歌の〈歌学〉が強調され、それらが「家持個人に帰するものではなく、古代日本の歌が辿る必然性の中にある」（本書結論）と結論されると、本書の言う「実践の〈歌学〉」とはいったいなんなのか、という疑問があらためてわいてくる。

中国詩学を導入した際に、『歌経標式』のような理論書を著すことではなく、鈴木氏が指摘するように「歌から理論を探る工程が必要」だったとするのならば、それはいったいなぜなの

か。体系的な歌論書とされる『歌経標式』にしても、和歌の実態とはかけ離れた、いわば理論のための理論に陥っているとの指摘があることを考えると、「詩学」に相応するような「歌学」といえる体系的な理論が存在しないことは、未発達な過渡期的な段階としてではなく、もつと根本的な文化の相違点としてとらえられるのではないだろうか。

ハルオ・シラネ氏がいうように、「アリストテレスの提示した概念、あるいはテキストとしての詩歌を形成の観点から評価する」という近代ヨーロッパの概念としての「詩学」は、日本の和歌を論じるうえでは機能しない。たいていの歌論の焦点は歌を詠むこと（たとえば、言葉や場をふさわしく用いる方法）にあり、多くのヨーロッパの詩学にみられるような詩歌の鑑賞や分析にはない」（『世界へひらく和歌—言語・共同体・ジェンダー—』勉誠出版、二〇一二年）のであり、中国の「詩学」もまた、和歌の内包するある種の論理には合致せず機能しないのではなかったか。そう考えたとき、本書によつて俎上にあげられた家持の「実践の〈歌学〉」とは、中国詩学との根本的な相違を浮き彫りにする観点とみなすことが可能となる。そうした「実践の〈歌学〉」を究明していくならば、日中比較文学にとどまらず、「東アジア」をも越えて、「世界文学」を射程

に入れた議論も可能となるだろう。

本書序章において「東アジア」という概念に触れているところから、そうしたことは鈴木氏の視野にすでに入っているのかもしれない。ただ、「東アジア」が日本を含めた地域としてではなく、さながら対立概念のように叙述されていることには違和感が残る。あるいは、ここでの「東アジア」とは、「中国」とは同様の意味で使用されているだけなのかもしれないが、そうであるとすれば、書名にあるとおり家持がいかに「中国文学」を受け入れ、いかに新たな表現を構築したかということに明らかにすることを目指したという本書において、あえて「東アジア」という概念語を持ち込む必要性は感じられない。

たとえば、ジェイスン・ウェップ氏は、本書でも根幹をなす辰巳正明氏の一連の論を踏襲しつつ、「漢字表記及び漢籍が、東アジア全体のそれぞれの場所できかに受け入れられ、それぞれの地方色を帯びた漢詩がいかにして形成されたかという問題」について論じている（『アメリカにおける前近代日本学研究——日本古典文学』から「東アジア比較文学」へ——『東アジア比較文化研究』第6号、東アジア比較文化国際会議日本支部、二〇〇七年）。こうした和／漢という二項対立的な思考を超える必要がある場合には、「東アジア」という概念が有効に

働くことになるだろう。また、ヴィーブケ・デーネーケ氏は、本書でも重要な位置を占める「山柿之門」を含む家持の作例（巻十七・三九六九～三九七二番歌および序）について、「短歌、長歌、漢文の散文、漢詩という四つのジャンルが登場している」として、そうした異なる言語とジャンルを「並置」した形態が日本文学の重要な形態の一つであることを指摘し、その理由をもっと注意深く考える必要がある、と問題提起している（ヴィーブケ・デーネーケ（衣笠正章訳）「和歌と漢詩——古代ローマからの鳥瞰——」『世界へひらく和歌——言語・共同体・ジェンダー——前掲』）。

これらの問いかけに対して、鈴木氏がどのように切り結び、家持の〈歌学〉を提示していくのか。今後のさらなる展開にも期待したい。

（A5判、二八〇頁、笠間書院、二〇一四年二月発行、定価五、八〇〇円＋税）